

# 人焉んぞ度さんや

土田龍太郎

たれにてもあれ人をただ一目うち見るままに、その性の善しや悪しや、行ひ正しや邪なりや、はたその口より出づる言のは眞なりや偽りなりや、たちどころに悟りて誤たぬわざ、世のなべてのきはには望むべくもあらじ。

しかるに論語爲政篇にては、人の性つひにえ隠しがたきを述ぶる章句ありて、孔子そこにて左のごとくに説きたり。

子曰視其所以觀其所由察其所安人焉度哉人焉度哉

子曰く、その以す所を視、その由る所を觀、その安んずる所を察せば、人焉んぞ度んや、人焉んぞ度んや。

孔子のつひに至りしさかひのいとも幽かに妙なること、この章句によりてぞ思ひやるをうべき。

ここに並べ考へまほしきは、史記魏世家の一段なり。魏文侯、魏成子と翟璜といづれをわが相に用ふべしや思ひめぐらせどもえ定めかねつるままに李克といへるものに諮り問ひしとき、この李克

居視其所親、富視其所與、達視其所學、窮視其所不爲、貧視其所不取

と曰ひて、公の視とがむべき五箇事を列ねて後、

五者以定之矣、何待克哉。

と云ひとぢめたり。同じ問對、説苑に載り、さらに呂氏春秋論人篇には

凡論人、通則觀其所禮、貴則觀其所進、富則觀其所養、聽則觀其所行、止則觀其所

好

習則觀其所言、窮則觀其所不受、賤則觀其所不爲。

と説きたれど、ここに見ゆる八觀、もと李克の五視に由り來れるに似たり。先に引ける孔子の語、今かりに李克の五視、呂氏の八觀に擬へば、一視一觀一察の説ともや稱ふべからむ。李克と呂論と孔子、おのおのの列ぬることども、名と數こそは同じからね、これらいづれも人の正邪眞偽能否を辨へ識らまくほりするとき必ずけみすべき徴にほかならで、これらの徴をとほして、いかなるものもその本性まがふかたなく顯れではあるべからざるなり。

されば爲政篇の一視一觀一察を李克の五視、呂論の八觀とただ一わたり比ぶれるときは、いづれ似よれる人物鑑定術なりやにもおほゆれば、これら云ひもてゆけば、うき世を

渡るよすがなる世俗智とさしも距らざるがごとくにて、いささか品下りて見ゆまじきにもあらざるめり。

李克と呂論につきてはともかくもあれ、爲政篇より引ける孔子の語、世俗智のさかひにおもむけてやみなませば、いともつたなくかひなからまし。

「廋」は「匿」にて隠すことを云ふなり。そも人のおのれを隠すと顯すと、またものの隠ると顯はると、これらもといかなることを云へるやらむ。物に内外のけぢめあり、人の表と奥と異れりとせば、人とのまことの性、いづかたに宿りいづこに潜めるならむ。

これらの問ひごとげにいとこみいりて、ねもころに考へゆくにしたがひていよいよつれゆくは避りがたきわざなれば、なべてのさかしら人ただせむすべ知らに思ひ惑ひてやみなむほかなきにたり。

もし世のなみなみの物識り人のありきたれることのすぢに沿ひて考へなば、おほかた左のごとくにも説くをうべし。

まことは人の内に潜みて表に顯ることまれなり。表に見ゆるは嘘偽り、謀り巧みにすぎねばさしも心留めであるべし。人のまことを知らむとせば、表には見えぬ人の奥をあくまで探りて、内なるを外に暴し發かではあるべからず。かく言へばひとわたりはさもあるべく聞ゆべけれども、これ深き理りにあたれりとはえしも思はれねば、あかずおぼゆるぞあいなき。

凡俗につきてはいかにてもあれ、まことの聖賢の眼に向ひてはなん人もおのが心の邪ま<sup>まなこ</sup>と才の拙きと、いかで隠さんとするもえ隠しおほすまじく、つひには露はれでやむことなきなり。物にせよ人にせよ、およそ世にありとは顯るるにほかならず。存在すなはち顯現なりともや云ひつべき。孔子の人焉んぞ廋んやとくりかへし説きしは、存在即顯現てふいみじきことわりをつとに悟りみたるがゆゑなるべし。人のまことの性のおのづと顯るるにつけても、ことに目に立つべきところ三所あり。すなはち以す所、由る所、安んずる所に、げにこの三所を要とせば、人に向ふときよろづ危ふからざるべし。

世々の偽君子あまたにて數ふるにいとまあらず。例へばかの漢の王莽、おのが邪智を逞して、一たびは社稷を篡ひしなれば、つひにみづからを隠しおほせたりともや云ひつべからむ。廋すとも廋しがたき王莽の邪佞をさながら悟りみたりし具眼達識の人士、朝野にたえてなかりしとは思はれねども、たとへ聖賢なりともえ抗ふまじき時の勢ひのごときものありしなるべし。